

新上五島町で 発達障害への理解を深める啓発

特定非営利活動法人 せかい卵

〒857-4413 長崎県南松浦郡新上五島町今里郷 446-4

助成事業の概要

本事業は、発達障害があるお子さんについての早期支援・早期介入について長年にわたり、世界トップレベルの研究を実施してきた児童精神科医本田秀夫先生を新上五島町にお招きし、平成30年4月29日、新上五島町の鯨賓館ホールにて開催した。まず、町民向けに発達障害に関する早期診断・早期介入・早期理解を中心とした講演会を第1部で実施した。さらに、第2部は教育・福祉・看護などの専門職の方々（教員・養護教諭・保育士・看護師・障害者支援施設勤務者・相談支援専門員・当事者）、保護者が集う形でシンポジウムを設けた。それぞれの専門性から何を見るか、あるいは当事者とその保護者として必要だとされることは何かなど、活発な意見交換が実施された。シンポジストは、本田先生のほかに、私立通信制高等学校教頭、元新上五島町副町長、県立高等学校教員1名、フリースクールを運営するNPO法人代表、元若者サポートステーション所長、スクールカウンセラー1名、中学校教員1名、といった顔ぶれで、多彩な立場から意見を発信しあい、受け止めていくことができた。

事業の成果

今回は、チラシとHPで講演会の実施を周知した。町内には勉強熱心な町民の方も多いが、GWの前半、連休の中日ということもあり、予想したよりも人数は少なかった。ただ、逆に言えば、予定を知らせた段階で「これは絶対に行きます」と言っ

てくださった方もあり、発達障害について興味関心が高まっている方々が離島へき地にもいることがわかってきた。本田秀夫先生は、著書もあり全国的に著名な先生であるので、当事者の保護者の方が「こんな方が上五島に来るなんて！信じられない」と言って駆けつけてくださったことも実施団体としては嬉しいことだった。

本田先生のメッセージは「早期診断・早期支援によって自主性のある子どもを育てていく土壌を作ること」ということだった。これは発達障害に関わらず、少子化の進む日本でも必須になっているテーマである。第1部の講演会の参加者は70名であった。

第2部では、シンポジウムを実施した。参加者は約30名であった。今回は新上五島町で支援活動に携わっている島外の方々も呼ぶ形をとることで、新上五島町の発達障害支援を巡る率直な意見をうかがう場にもなった。例えば、へき地であるため若者サポートステーションは隣の五島市に中心があり、新上五島町には月に1度の訪問体制をとっている。効率のよい支援体制には連携が必須であるので、日ごろ会わない別業種の方々と接することは非常に有意義であった。町内には県立高等学校が2校あるが、他にも通信制の高等学校の先生をシンポジストとしてお招きして、お互いの交流を深め、生徒の実情を話せる良い機会になった。また、保育園・小学校・中学校・高等学校に所属する職員の交流は、切れ目のない支援体制というのがどういう実践活動になるのか、一人ひとりのお子さんをイメージするために何を学び、何をすべきか、ということをより具体的にし

ただろう。また、成人支援に携わる方々の参加も見られ、成人支援の前の段階での支援をイメージすることで、それが成人支援にどう活かせるのか、どうやって連携をとって、成人支援を活発にしていけるべきかという意見もあり、切れ目のない支援についてイメージができたことは多いと思われた。講演会だけではただ聞くだけになって終わってしまうが、より弾力的な活動を目指していくうえでは、こうした形で交流を深めることが一層大切になってくる段階に入ってきており、その意味で今回の事業は成功を取めたと言える。

■ 成果の広報・公表

成果の広報と公表については、主としてHPにて行った。実施報告をHPと当団体のブログで実施した。

成果については参加者にアンケートを取った。しかし、機微な内容も含んでいたため当団体内だけの閲覧に留めた。というのも、発達障害というのは見えない障害であるため、見ただけではわかりにくく、だからこそ一層の悩みが募るケースがあるからである。

■ 今後の展開

さて、今後の展開としては次のようなイメージを当団体では持っている。

新上五島町においては、少子高齢化が進み、労働力も不足している。現在、町での出生は月に2件程度にとどまっている。一方、町には求人があふれており、介護・看護は慢性的に不足状態である。そのため、他業種連携と言うのはよく言われるところである。

また、子どもたちも島を出て就職し、その後戻ってくることは少ない。戻ってくるケースとして最近多いのは、島外で結婚し子どもをもうけるが離

婚して帰ってくる母子である。つまり、都市部では生きづらさを持つ人たちが多く残る島になっていくことが予想される。

そのため、保護者支援を進めていくことが一つの方向性としてあげられる。養育に際してのニーズは各家庭において異なってくるため、個別具体的なメンタルサポートが一つ必要である。

同時に、子ども支援も必要である。特に、発達障害やその傾向にある子どもたちへの学力の保障については、力を入れていきたいと思っている。どこに出ても自分の力で解決へ向けて動き出せるには、状況に対応できるための知力（アカデミックスキル）があることと、生活できる力（ライフスキル）のどちらも重要であるが、発達障害ではこのバランスが悪いことが多いからだ。

この二つを兼ね備えたものとして、放課後等デイサービスの運営に注力しているが、より保護者から理解を得られるように、啓発事業も行っていきたい。